東京大学東洋文化研究所附属東洋学研究情報センター報

明日の東洋学

March 2011 no. 25

Research and Information Center for Asian Studies (RICAS)
Institute Advanced Studies on Asia, University of Tokyo

「骨董市場竹簡」をめぐる諸問題

小寺　敦

中国出土文献学術サイトがもたらした変革

西山尚志

「骨董市場竹簡」をめぐる諸問題

小寺　敦（東京大学東洋文化研究所准教授）

湖南大学岳麓書院。
2007年に香港の文物市場より、秦代のものと鑑定された竹簡を購入した。

最近の中国大陸では非常に多くの考古発掘がなされており、陸続と報告書が刊行されている。地下から得られた資料を出土資料といい、その中、文字で書かれたものを出土文字資料という。文字が竹製・木製の細長い木の板に書かれたものを、それぞれ竹簡・木簡といい、そのうち１枚に２行以上書かれたものを牘といい（多くは木牘）、あわせて簡牘とよぶ。中国の場合、大抵木簡ではなく竹簡が用いられ、竹簡は紐（「編」）で一冊に綴じられた（「篇」）。また、絹に書かれたものを帛書といい、簡牘とあわせて簡帛とよんでいる。先秦時代（前221年以前）には、まだ紙が発明されていないため、文字はこうした素材の上に書かれていたのである。

中国の出土文字資料は、それなりの程度まで解読されている漢字で書かれている。だから、「モノ」と比較して、より詳細な歴史を再現することが可能である。また、戦国時代以降の出土文字資料は、その内容上、『孟子』・『荀子』などといった、今日まで滅びずに残った文献と比較検討する方法を用いやすい。そこで、考古学以外の歴史・思想・文学・書道などといった、文字を扱う学問分野の研究者の中、少なからざる人々が、戦国秦漢時代の出土文字資料に取り組んでいる。

この出土文字資料については、「学問」の世界以外からの参入もある。文物コレクターである。先秦時代のこういった資料には、かなりの値がつくものが多い。また、村おこし・町おこしの種になる観光資源としての側面ももつ。

こうした事情が、出土文字資料の市場価格を押し上げる。市場で高値がつけば、偽物作りに精を出す輩が現れる。したがって、出土資料に関する研究は、偽物との戦いでもあった。例えば、甲骨が発見された直後から、偽物が出回りだしたという。また、青銅器の弁偽は、一つの学問体系をなしているといっても過言ではない。困ったことに、文字つきの出土遺物は、しばしば同種の文字なしのものよりも市場価格が高くなるため、文字のない本物の甲骨・青銅器に、後から文字を刻み・彫り込むことが行われた。戦国秦漢時代の竹簡も、その例外ではない。

ここでは出土文字資料の中、主として戦国秦漢時代（前５世紀～後３世紀初めごろ）の竹簡に関する問題をとりあげ、中国の出土資料研究のもつ魅力と危うさの一端をご紹介したい。

「册（冊）」の文字は、既に甲骨文にみられるため、殷代から竹簡・木簡が存在したことはほぼ確実である。しかし、竹や木は地中で腐食しやすいため、現在最古の簡牘は、戦国初期（前５世紀後半）、曾侯乙墓（湖北省随州）出土のものである。

「腐食しやすい」と書いたが、それゆえ古い時代のものはなかなか残りにくい。湖北・湖南省を中心とする、戦国時代に楚国の勢力圏だった一帯は、地下水が豊富であることから、地下の遺物が無酸素状態になりやすく、保存される可能性が他地域より高い。また、甘粛省など、西北地方は逆に乾燥気候のため、こうした資料が腐敗しにくく比較的残りやすい。だから、今日我々が目にする戦国秦漢時代の簡牘資料は、楚地域、これに加えて四川・甘粛といった秦の被征服地のものが多い。簡牘資料に地域的偏在があることは、これらの資料を利用する上で注意されねばならない。

以下、先秦秦漢時代の出土簡帛をかいつまんで掲げる。これらが多くの墓から出土しながらも、地域的な偏りのあることが理解されよう。それなりに注目を集めるものだけでも、これくらいの数にはなる（括弧内は出土地と最初の発見年）。

楼蘭ニヤ（尼雅）出土簡牘（新疆、1901年）、敦煌漢簡（甘粛、1907年）、居延漢簡（内蒙古・甘粛、1930年）、楚帛書（湖南省長沙、1942年）、長沙五里牌楚簡（湖南省長沙、1951年）、長沙仰天湖楚簡（湖南省長沙、1953年）、長沙楊家湾楚簡（湖南省長沙、

1954年)、信陽長台関楚簡（河南省信陽、1956年)、銀雀山漢簡（山東省臨沂、1972年)、馬王堆漢墓簡帛（湖南省長沙、1972年)、八角廊漢簡（河北省定県、1973年)、江陵鳳凰山漢簡（湖北省江陵、1973年)、居延新簡（内蒙古・甘粛、1973年)、睡虎地秦簡（湖北省雲夢、1975年)、曾侯乙墓竹簡（湖北省随州、1977年)、阜陽漢簡（安徽省阜陽、1977年)、天星観楚簡（湖北省江陵、1978年)、九店楚簡（湖北省江陵、1981年)、江陵馬山楚簡（湖北省江陵、1982年)、張家山漢簡（湖北省江陵、1983年)、徳山夕陽坡楚簡（湖北省常徳、1983年)、江陵秦家嘴楚簡（湖北省江陵、1986年)、放馬灘秦簡（甘粛省天水、1986年)、包山楚簡（湖北省荊門、1987年)、慈利石板村楚簡（湖南省慈利、1987年)、龍崗秦簡（湖北省雲夢、1989年)、敦煌懸泉漢簡（甘粛省敦煌、1990年)、王家台秦簡（湖北省江陵、1993年)、郭店楚簡（湖北省荊門、1993年)、尹湾漢簡（江蘇省連雲港、1993年)、虎溪山漢簡（湖南省沅陵、1999年)、里耶秦簡（湖南省龍山、2002年)、水泉子漢簡（甘粛省永昌、2008年）

出土地の不明なもの、つまり骨董市場で買い戻された簡牘は次の通り。

香港中文大学文物館蔵簡牘（複数年にわたる)、上海博物館蔵戦国楚竹書（1994年)、湖南大学岳麓書院蔵秦簡（2006年)、清華大学蔵戦国竹簡（2008年)、北京大学所蔵秦簡・漢簡（2008年）

遺跡によって、出土する簡帛の分量はさまざまである。例えば、戦後初めて発見された五里牌楚簡は38枚しかないが、岳麓秦簡や清華簡で２千枚以上、2002年発掘の里耶秦簡は２万枚以上もある。簡帛の内容はさまざまで、里耶秦簡のように実務的な行政文書もあれば、銀雀山漢簡『孫子』・郭店楚簡『老子』といった思想書もあり、また法律文書、占い、医学、算数の書などもある。また最近は骨董市場で「発見」されるものが増えており、報告書の出版も多く、利用可能な資料の増加ペースが上がっている感がある。

ところで、出土文献は、発見形態によって大きく２種類に分けることができる。①正式な発掘により発見されたものと、②骨董市場で発見されたものとである。

①の場合、例えば河南省安陽西高穴二号墓（いわゆる「曹操高陵」）をめぐって交わされている論争のように、真偽問題から解放されるわけではないが、②に比べれば穏やかである。

②の場合、骨董市場に出てくる文物には、偽物がかなり含まれている。そこで研究機関が買い戻す場合、専門家が念入りに調査・検討した上で、購入するかどうか判断する。

こうした資料の真偽の判定法には、次のようなものがある。字形・書体の分析、伝世文献や過去の出土資料との文章内容比較、理化学的方法（炭素14年代（炭素の放射性同位体を利用して年代を測定)・電子顕微鏡撮影・成分分析など)。理化学的方法以外の手法は、経験によるところが大きく、本物をたくさん見て慣れるしかないともいわれる。理化学的方法は信頼性が高そうに思われるかもしれないが、盲信は危険である。例えば、出土竹簡には、文字の書かれていない「空白簡」と呼ばれるものが多数ある。これに後から文字を書けば、竹簡の文字の書かれていない部分を炭素14年代で測定しただけでは、偽物を見破ることができない。そのため、最近では文字の部分も検査することがある。この種のことでは、どの分野でも同じであるが、偽作者と鑑定者とのいたちごっこである。

骨董市場から買い戻された竹簡の呼び方については、まだ定まった名称はない。「盗掘竹簡」や「非正式発掘竹簡」と呼ばれたりもするが、これだと最初から偽物の可能性を排除しているニュアンスがあって（盗掘品なら、本物である可能性が高くなるため)、不適当な気がする。ひとまず「骨董市場竹簡」とでも呼んでおくべきだろうか。

骨董市場に簡牘類が現れることや、そこに出現した偽物にだまされる人がいるのは、何も今に始まったことではない。ただ、90年代以降はそれが加熱気味である。比較的よく知られているところでは、1995年、日本の書家が、日本の骨董市場で戦国竹簡と称する偽物を、８枚50～60万円でつかまされ、その後も同類の竹簡が続々と市場に現れた事件が報道されている。これは炭素14年代によって、竹簡が現代の竹製と判明し、その内容は包山楚簡という有名な竹簡からの引き写しが多かったという、かなり稚拙なものだった。

コレクターがだまされただけなら、偽物をつかまされるのも経験の中という世界らしいから、やむを得ないことかもしれない。しかし、研究者がそうなると冗談では済まないから、慎重にその真偽を検討する必要がある。

骨董市場に、これだけ頻繁に中国大陸の出土文物が

流入するのは、無論、コレクターが金に糸目を付けず欲しがるからである。甲骨や青銅器ほどではないにせよ、先程の偽戦国竹簡事件のように、古い時代の簡牘には、骨董市場でそれなりの高い価格がつく。

湖南省長沙市の長沙簡牘博物館の宋少華氏が仰っていたことであるが、現在は正式な発掘が非公式な発掘（＝盗掘）に追いつかないとのことである。盗掘が増えると、研究機関はこれを骨董市場で買い戻さねばならない。そうすると、更に盗掘が盛んになり、また偽物作りにも精が出るわけである。盗掘と偽造のスパイラルである。時折盗掘集団の摘発報道があるが、これは氷山の一角だろう。偽作技術はピンキリであり、青銅器では専門家でも意見が分かれることがままあることから、簡牘でもそういう高度な偽物が現れることを、頭の片隅に置いておく必要がある。従来、簡牘研究者は、正式に発掘された資料を利用することが多かったため、真偽が問題とされることはさほど多くなかった。しかし、今や甲骨・青銅器研究並みの心構えが必要になったということだろう。

こういった出土資料研究の現状を端的に示す動きが、中国大陸でつい最近あった。

昨年の第11回全人大常委会では、刑法修正が審議され、経済的な非暴力犯罪に対する死刑の規定が外される方向で検討された。検討された罪には、文物の密貿易・窃盗、古文化遺跡・古墓葬の盗掘、古人類・古脊椎動物等化石の盗掘が含まれている。これに対して、中国考古学会理事長の張忠培氏の委託を受け、湖南省文物考古研究所所長の郭偉民氏の起草により、上記項目に関する刑法修正をしばし見合わせるよう求める声明が出された。（「関於暫緩取消盗掘古文化遺址・古墓葬等三項死刑罪名的呼吁書」（『中国文物報』2010年11月26日））

ここでは、この声明の是非は問わない。ただこうした声明が出ることは、遺跡の盗掘や文物の窃盗・横流しが横行している現実と、中国大陸の研究者たちにそれほどの危機感があることをよく示している。

骨董市場経由の戦国秦漢時代の竹簡は、以上のような状況にあるため、安全策をとって、こうした資料を相手にしない研究者が少なからず存在する。しかし、もしこれらが本物なら、貴重な資料をみすみす棄ててしまっているわけで、これほど勿体ないことはない。例えば、上海博物館蔵戦国楚竹書には、伝世文献に記載のない歴史記録や、『詩（経）』を論じた最古級の文章などがある。岳麓秦簡の法律文書の内容は、有名な睡虎地秦簡のそれよりも信頼が置けるともいわれる。清華大学蔵戦国竹簡（清華簡）には、殷周交替期に関する詩や、『（尚）書』の諸篇とされる文献、年代記などがあり、北京大学所蔵竹簡には、『老子』や小説などが含まれているとされる。中国古代の研究者にとって、まさに垂涎の内容である。それに、研究用の資料として利用するかしないかは別にして、こういう文物の中、本物の可能性があるものはひとまず保護する必要がある。

少し前にどこかであったように、ろくに検証もせずに偽造品を本物として扱った場合、研究者としての責任は免れない。しかし、偽物の可能性がゼロではないと認識した上で、十分手を尽くして弁偽を行い、その時点では本物の可能性が高いと判定したが、後から別の証拠が見つかって偽物と判明した場合は、道義的非難を受けることはないと筆者は考えている。

今日の中国出土資料研究において、「骨董市場竹簡」はまさに宝の山であるが、それがいつの日か偽物だと判明するリスクは皆無ではない。そもそも、この種の竹簡の研究を進めることそれ自体が弁偽でもある。倒錯的かもしれないが、それがまたこの研究の魅力の一つともなっている。

本稿執筆時点では、清華簡の正式な図版本が出版されたところであり、中国大陸では、早速インターネット上に研究成果が続々と報告されている。岳麓秦簡の図版本も遠からず出版されるそうである。筆者自身は、それらの書籍が海を越えて手許に届くのを一日千秋の思いで待っている。

〔参考文献〕
李均明『古代簡牘』（文物出版社、2003年）
冨谷至『木簡・竹簡の語る中国古代—書記の文化史—』（岩波書店、2003年）
胡平生「論簡帛弁偽与流失簡牘搶救」（『簡帛網』、2008年5月26日、『出土文献研究』9、2010年、に転載）
大西克也・宮本徹『アジアと漢字文化』（放送大学教育振興会、2009年）

中国出土文献学術サイトがもたらした変革

西山尚志（中国山東大学文史哲研究院講師）

私は2009年夏から中国の山東大学文史哲研究院に奉職し、同時に「簡帛研究網」という学術サイトを管理することになった。本稿ではこの学術サイトの管理を通して、中国の伝統学問がどのように変化しようとしているのか、その現状の一端を紹介したい。

私の専門領域は中国古代の出土文献研究で、中国では自分の専門を「簡帛学」と説明することも多い。正確に言えば、簡帛学は出土文献研究に内包される領域で、「簡」は木簡・竹簡（木や竹の札）、「帛」は絹を指す。つまり簡帛学とは、木簡・竹簡・絹に書かれた出土文献を研究する学問である。私が管理している「簡帛研究網」とは、このような分野に関する論文・札記・学会情報・書評などの投稿を受け付け、ネット上で配信する学術サイトである。

出土文献研究と伝世文献研究の最大の相違は、古文字の読解が必要な点であろう。秦の始皇帝による文字統一以前の漢字は、それ以降から現在までの漢字と比べ、字形や読み方が非常に異なるため、その読解には高い専門性が要求される。その中でも戦国時代の文字は20世紀末までは不明な点が多かった。しかし、1990年代後半からこの戦国文字研究は劇的な進歩を遂げた。この大躍進の背景には大きく二つの理由があった。一つは、1998年に公開・出版された「郭店楚簡」（湖北省荊門市郭店村より出土した戦国時代の楚国の竹簡）と2001年から公開・出版されている「上博楚簡」（香港骨董市場で発見されて上海博物館が買い取った楚の竹簡、現在まだ全ては公開されていない）に『老子』・『礼記』・『周易』・『大戴礼記』の一部があり、これらが通行文献と比較できたことが大きい。そしてもう一つは、20世紀末からコンピューターやインターネットが急速に普及し、学術サイト上で戦国文字の新解釈が次々と発表され、議論が進んだためだ。紙の学術誌と違い、学術サイトは研究成果を即時に配信できるため、戦国文字研究は文字通り日進月歩の領域であった。そして開発当時の「簡帛研究網」は、この後者を最先端で牽引していた。

「簡帛研究網」は、ハーバード燕京研究所の資金援助を得て、2000年2月に開通した。当時の管理者による紹介文によると、04年1月末までに1092本の文章が掲載されており、約1.3日に1本のペースで文章を配信していたことがわかる。いかに出土文献研究において簡帛研究網が注目・重視されているかが伺えよう。

簡帛研究網が軌道に乗った後、いくつかの類似サイトが立てられた。現在、出土文献研究における主要なサイトは以下の三つである。

簡帛研究網：http://www.jianbo.org/
孔子2000　：http://www.confucius2000.com/
簡帛網　　：http://www.bsm.org.cn/
復旦大学出土文献与古文字研究中心
　　：http://www.gwz.fudan.edu.cn/

現在、簡帛研究網は山東大学、孔子2000は清華大学、簡帛網は武漢大学、復旦大学……研究中心は復旦大学がそれぞれ管理している。各サイトにはそれぞれ若干の違いや特徴があるが、基本的な性質は同じである。

まず、これら出土文献における学術サイトの基本的な性質と、学術界における位置づけを紹介したい。

①現在のところ、各国の研究機関は学術サイトに掲載された論文を業績として認めていないが、刊行物の論文・著書ではこれらを引用・参考することが常識化している。つまり学術界では、これらを業績にならない論文として位置づけている。
②文字数・写真図版使用の制限はない。
③投稿論文が審査を通過すれば、すぐにアップして閲覧可能にする。審査は緩めである。
④未発表でも既発表でもどちらも掲載可能。ただし、既発表の論文は掲載先を明らかにする。
⑤使用言語は中国語のみ（簡体字・繁体字ともに可）。
⑥論考に限らず、出土文献に関わる学会情報・出版情報・書評なども受け付ける。
⑦民間人でも投稿可能。ただ現状では、投稿者の大部分が専門家である。
⑧出土文献の図版・釈文が出版された後、初めてその出土文献に関する論考を投稿できる。それ以前の「フライング」は倫理上認めていない。

「簡帛研究」のホームページ

紙媒介の学術雑誌と比べて、このような学術サイトの最大の革新性は②③にあろう。つまり字数・図版の制限がない点と、即時に配信できる点である。そして、これら学術サイト上の論文の学術的価値を下支えしているのは、①という学術界の認識と趨勢である。

字数制限がないということは、つまり短文でも長文でも投稿できる。短文でも投稿可能であれば、小さなテーマでも発表できる。極端な例だが、たった一つの古代文字の新解釈に関する論考では中国語で千字程度しかない場合もある。このような論考は、紙上の雑誌ではなかなか掲載できないだろうが、こういった中にも重要な指摘は少なからずある。逆に、出土文献の訳注などは、字数が数万字に及ぶ場合がある。例えば、中国のCSSCIと呼ばれる国家級学術誌では中国語で一万字が目安と言われているが、私がかつて学術サイト上で発表した上博楚簡『鬼神之明』という出土文献の訳注は、中国語で二万六千字ほどあった。このように学術サイトでは、字数はほぼ無制限である。また、写真図版の使用もほぼ無制限だ。古文字読解に関する論考では、図版を載せると読者は読みやすくなる。学術サイトは出版費用がかからないので、カラー写真でも問題がない。

もう一つは即時配信できる点だ。日本の中国学系学術誌は、多くても年に2度ほどしか刊行されない。中国のCSSCI学術誌は月刊か隔月が多いが、中国の研究機関ではCSSCI雑誌への掲載数が昇給・昇進などの目安となっているため、常に投稿が集中している。更にCSSCI雑誌の審査通過率は5%以下とも言われ、若手研究者・院生は大家に比べて掲載を待たされる傾向にある。それに対し、学術サイトは毎日更新しているため、大家・若手を問わず即時に配信できる。

例えば、上博楚簡には『鄭子家喪』と名付けられた出土文献があり、この図版・釈文は2008年12月に出版された。学術サイトでは08年12月31日に初めてこの『鄭子家喪』に関する論文が発表され、わずか一ヶ月後の09年1月末までには計22本もの論文が発表された（注①）。筆者もこの出土文献の研究に関わったが、釈読に関する重要な指摘はこの1月までにほぼ出された感がある。

例を一つ挙げよう。この『鄭子家喪』という説話文の中で、すでに死んだ子家という人物に対し、「秭木三眷、絕索㠯蔡」ということが行われたことが記されている。08年12月に出版された釈文では、一句目の解釈を保留とし、二句目の「絕索」を「稀少」の意とし、「蔡」を「供」と読んだ。つまりこの時点では、この文章の意味はほとんどわかっていなかったのである。しかし、08年12月31日の復旦大学の学術サイトで、この二句が『墨子』節葬下篇の「桐棺三寸」・「葛以緘之」と比定できることが指摘された。また、「眷」は「寸」と読むことを先行研究を提示して証明するなどして、この四字二句を「秭(梨)木三眷(寸)、絕(疏)索㠯(以)蔡(紘)」と読み、「(棺桶を粗末な材料の）梨の木で三寸の厚さにし、粗末な紐で結ぶ（という処分を下した)」という意味に解釈された。その後は、若干の異説が出たものの、この説はほぼ定説として落ち着いている。

そしてこれら学術サイトの論文が学術的価値を保持している基礎には、世界中のほぼ全ての出土文献研究者がこれら学術サイトの論文を論文として認め、各自の論文・著書内でもこれらを引用するのを常識化しているという学術界の認識がある。いわゆるブログや掲示板の類と決定的に異なるのはこの点にある。例えば、2003年12月に公開された上博楚簡『周易』の訳注である池田知久監修『上海博楚簡の研究（四)』などを見ても、学術サイト内の論文が多数引用されている（注②)。同書の論著目録には計220本収録されているが、学術サイトの論文（紙の雑誌に再録されたものも含む）は96本にも及んでいる。

学術サイトは、各研究者の国籍・年齢・地位・学派などを超えた学術交流の場ともなった。中国・台湾・日本・欧米などの研究者が中国語を共通語とし、国境を超えて即時的な学術交流が行われている。大陸・台湾に代表されるように、各国・各地域の人・資料・情

報の交流はまだ容易ではないし、費用面での負担も大きい。上述したように学術誌への投稿も順番待ちの現状の中、特に若手研究者にとって学術サイトは絶好のアピールの場にもなる。私も学術サイト上を通して知り合った研究者は決して少なくない。このように、学術サイトを通して新しい学術交流のかたちが始まろうとしているのである。

もちろん、学術サイトがメリットばかりをもたらしたわけではないだろう。学術サイトには、ハッカーの攻撃やサーバーの故障、または何かしらの理由で閉鎖されれば、即時見られなくなるというリスクもある。それに情報の氾濫は著しい。学術サイトの論文を読むことは、名作をじっくりと読む営為とはほど遠い。

こういった学術サイトのもたらした変化を快く思わない識者も多いかもしれない。しかしこの趨勢を逆手にとって考えると、中国語で書いて投稿すれば、すぐにこの学術交流の輪の中に入り込むことができる。私は特に日本の中国学の若手研究者には、こういう場を利用して、世界の学術界にどんどん打って出て欲しいと願っている。

注① 小寺敦「上海博楚簡『鄭子家喪』訳注—附・史料的性格に関する小考」(『東洋文化研究所紀要』第157号、東京大学東洋文化研究所編、2010年3月）を参照。

注② 池田知久監修『上海博楚簡の研究（四)』(大東文化大学上海博楚簡研究班、大東文化大学、2010年3月）を参照。

センター便り

・平成 22 年度全国文献・情報センター
人文社会科学学術情報セミナーの開催

平成 22 年度全国文献・情報センター人文社会科学学術情報セミナーは、神戸大学経済経営研究所附属企業資料総合センターが当番機関として、平成 23 年 1 月 28 日（金）に神戸大学経済経営研究所に於いて開催され、本センターも参加した。各センターの事業報告に続いて、今後の各センターの連携のあり方について活発な議論が行われた。

東洋学研究情報センター運営委員会委員
（2010 年度）

所外委員
小松　久男　大学院人文社会系研究科・文学部教授
村田雄二郎　大学院総合文化研究科・教養学部教授
加藤　　博　一橋大学大学院経済学研究科教授
小長谷有紀　人間文化研究機構・国立民族学博物館民族社会研究部教授
水野　直樹　京都大学人文科学研究所人文学研究部教授
宮治　　昭　龍谷大学文学部教授
宮嶌　博史　成均館大学東アジア学術院（韓国ソウル）教授
柳澤　　悠　東京大学名誉教授

所内委員
園田　茂人　教授　センターアジア社会・情報
大木　　康　教授　東アジア研究部門（第二）
名和　克郎　准教授　汎アジア研究部門（兼）センター比較文献資料学（オブザーバー）
丘山　　新　教授　（兼）東アジア研究部門（第二）センター比較文献資料学
桝屋　友子　教授　西アジア研究部門（兼）センター造形資料学
板倉　聖哲　准教授　東アジア研究部門（第二）（兼）センター造形資料学
廣田　輝直　准教授　センター比較文献資料学
松田　康博　准教授　汎アジア研究部門（兼）センターアジア社会・情報

センター長
羽田　　正　教授　西アジア研究部門

センタースタッフ
羽田　正（はねだ　まさし）センター長　西アジア研究部門教授　比較歴史学
園田　茂人（そのだ　しげと）副センター長　センターアジア社会・情報分野教授比較社会学
丘山　新（おかやま　はじめ）センター比較文献資料学分野教授　仏教思想
桝屋　友子（ますや　ともこ）センター造形資料学分野教授　イスラーム美術史
板倉　聖哲（いたくら　まさあき）センター造形資料学分野准教授　東アジア絵画史
名和　克郎（なわ　かつお）センター比較文献資料学分野准教授　文化人類学
廣田　輝直（ひろた　てるなお）センター比較文献資料学分野准教授　東洋文化研究情報 DB
松田　康博（まつだ　やすひろ）センターアジア社会・情報分野准教授　アジア政治外交史
SMITH ROGER DALE（すみす　ろじゃー　でーる）センターアジア社会・情報分野准教授　海洋法・国際関係
松田　訓典（まつだ　くにのり）センターアジア社会・情報分野助教　インド大乗仏教思想

東京大学東洋文化研究所附属東洋学研究情報センター報　第25号
発　行　日　2011年3月31日
編集・発行　東京大学東洋文化研究所附属東洋学研究情報センター
〒113-0033　東京都文京区本郷7丁目3番地1号
電話　03-5841-5839（直通）
FAX　03-5841-5898
E-mail　ricas@ioc.u-tokyo.ac.jp
URL　http://ricas.ioc.u-tokyo.ac.jp
デザイン　コズギ・ヤヱ／印刷　富士リプロ㈱